

さけます関係研究開発等推進特別部会

な ら か ず と し
奈良和俊（さけますセンター 業務推進部）

はじめに

さけますは、国民の需要が高く、また、北日本の漁業振興を図る上で重要な魚種であるとともに、国際条約において母川国としての資源管理の責務が謳われています。水産総合研究センターは、さけますに係わる研究開発及び個体群維持のためのふ化放流を行い、水産庁を始め関係道県、民間増殖団体等との連携の下に、我が国のさけます資源の安定供給を目指しています。

「さけます関係研究開発等推進特別部会（以下「さけます特別部会」という）」は、さけます類に関する研究開発等について、さけますセンターと関係行政・試験研究機関及び増殖団体等との情報交換を密にし、ニーズを把握して、相互の連携強化を図ることにより、さけます類に関する総合的な研究開発等を効率的かつ効果的に推進することを目的に設置しました。この「さけます特別部会」には、さけます類の研究開発に関する情報の交換と協力を試験研究機関等の中で密に行うため「さけます研究部会」を設けるとともに、専門分科会として「サクラマス分科会」も設置しています。

平成19年7月31日に札幌市において、水産庁、関係道県の行政・試験研究機関、大学、増殖団体、漁業団体、水産総合研究センター内関係部署等の66機関195名参加の下に、午前中は試験研究機関、大学等を参集した「さけます研究部会」、午後からは関係行政、増殖団体、漁業団体等も加えた「さけます特別部会」を開催しました。なお、「サクラマス分科会」は、前日に同会場にて、15機関、54名を参集し開催しました。

さけます研究部会

さけますセンター福田所長の挨拶後、研究発表として、道立水産孵化場及び岩手県水産技術センターからサケ幼魚の放流-沿岸滞泳期における初期減耗に関する沿岸調査結果、北海道大学からサケ定置漁業の漁獲物投棄、日本系サケの生物エネルギーモデル、さけますセンターから耳石日周輪によるサケ幼稚魚の降海および成長履歴についての5課題が報告されました。特に耳石日周輪解析は、これまで未解明であった幼稚魚の降海および成長履歴を個体レベルで推定することが可能であり、沿岸滞泳期における幼稚魚の減耗メカニズムを理解する上で強力なツールとなることが期待されます（図1）。

次にサクラマス分科会の結果概要として、各機関が取り組んでいるサクラマス関連事業の概要、

サクラマス研究におけるトピック4課題(2機関)の情報提供、次年度以降の予算獲得に向けた研究企画検討結果を報告しました。

最後にさけます関連プロジェクト研究の紹介として、一般交付金プロジェクト研究2課題、民間団体からの受託研究1課題、水産庁受託事業1課題、農林水産技術会議プロジェクト研究2課題について、所管する機関から事業内容や関連機関との分担等について紹介されました。また、参加した試験研究機関・大学から19年度さけます関連の調査研究課題等について資料提供されました。

さけます特別部会

冒頭、水産総合研究センター井貫理事の挨拶に続き、来賓を代表して水産庁増殖推進部の田辺栽培養殖課長から挨拶を頂きました（図2）。

次に「さけます研究部会」の結果概要を報告した後に、各課題別にさけます関連の情報提供が行われました。①ふ化放流技術向上への取り組み：採卵受精に用いるサケ親魚の質（本号6頁～7頁参照）、光が仔魚に与える影響（養魚池での明る



図1. さけます研究部会における討議風景。



図2. 水産庁田辺栽培養殖課長挨拶。

さ)の2課題について、さけますセンターから報告しました。②幼稚魚調査の現状と今後の取り組み:岩手県沿岸域での幼稚魚調査について岩手県水産技術センターから、オホーツク沿岸域における幼稚魚調査に関して北海道立水産孵化場からそれぞれ報告されました。③サケマス資源の状況:本年の最新調査データを基に北太平洋及びベーリング海におけるサケマス資源調査結果が北海道区水産研究所から報告された。また、日本系サケの資源構造として、これまでの年級群毎のサケ資源の回帰結果及び本年度の回帰状況(推定)について、さけますセンターから報告しました(図3)。

④品質管理・輸出促進に向けた取り組み:本年度から水産総合研究センター、大学、道県、民間団体、企業等が参画して開始する農林水産研究高度化事業「サケ輸出促進のための品質評価システムの開発と放流技術の高度化」(本号15頁~16頁参照)について、北海道工業試験場とさけますセンターから担当分野における事業内容の報告が行われました。この報告について北海道定置漁業協会から、「サケの輸出促進策による国内での加工を含めた消費量への影響」について質問が出され、さけますセンター担当者より、国内の消費分を輸出に回すのではなく、資源量が低下した地域の資源回復や全体的な資源の安定化を図ることにより、国内の消費量を上回る分を対象として輸出を促進し、地域産業を振興する策である旨の回答を行いました。

次に、さけます特別部会及びさけますセンター業務に対する要望・意見交換の場においては、まず、予め配布した調査票により山形県水産試験場から「サクラマス幼魚の海洋における漁獲問題」について意見が出されていたため、サクラマス分科会でも関連課題が取り扱われておりその結果も踏まえ、さけますセンター担当者から本州サクラマスに関する新たな交付金プロ研も開始され、対応可能な分野から取り組む旨の回答を行いました。会場では、(社)北海道さけ・ます増殖事業協会から「今後、実施予定の耳石標識を用いた放流時期・サイズに関する調査の内容」について質問が出され、さけますセンター担当者から具体的な調査箇所及び調査内容について回答しました。また、北海道立水産孵化場から「本会議の持ち方及び来遊予測の情報提供の在り方」等について意見が出され、座長から改善すべきものについては、次回に向けて検討する旨の回答を行いました(図4)。最後に会議資料として添付した関係機関が実施予定の「さけます幼稚魚標識放流計画」について、さけますセンター担当者より説明を行い本会議を終了しました。

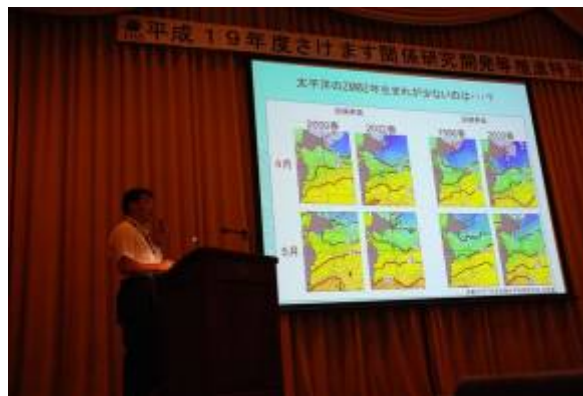


図3. さけます関連情報の発表風景。



図4. 要望・意見交換の場面。

アンケート結果

さけます特別部会の参加者を対象に、今後の会議をより充実させるためのアンケート調査を実施しました。質問「会議内容は業務に役立つ内容でしたか」に対し、「はい」53%、「まあまあ」47%で、「配付資料は役立つ内容でしたか」に対し、「はい」59%、「まあまあ」37%、「いいえ」4%の回答でした。要望・意見として、一方的な発表形式が多く質疑応答が少ない、増殖団体や漁業関係者を対象とした課題が少ない等の意見が出されました。

おわりに

本年度は第2回目の開催ですが、アンケート結果の意見等も踏まえ、水産総合研究センター第2期中期計画における研究開発等の成果の公表、普及・利活用の促進についての「国民との双方向のコミュニケーションの確保」の重要性を鑑み、次回以降、多くの関係機関の参加の下に、情報交換及び十分な議論もできるよう発表課題や会議の進め方等について、さらに検討したいと考えています。